

「国籍は天にあり」

本日は、天に召された方々を偲びつつ、ご親族の方々と共に礼拝をお捧げすることができ感謝いたします。これまでは毎年、会堂の前方に私たちの教会の信仰の先達者のお写真を飾っていましたが、今年からは、ゆっくりみることができるようにと、ホールに移動いたしました。この後、1ヵ月はホールに飾っておきます。私たちは今、このように写真を見ている側にいますが、誰もがいつかはパネルの彼らのグループ側に加えられることになります。つまり、誰もが確実に死に向かっているわけですから、私たちは「死につつある」と言い換えることができます。こちら側でこうして礼拝を捧げるのは、限られた期間に過ぎませんから、毎年行われているこの合同記念礼拝において、召された方々を思い起こすということは大切なことですが、お写真を見ながら、やがて私たちもまたこの地上の人生を終えることを自覚する方が、本当はもっと大切なことではないでしょうか。

天国への希望をもっていますか。

ここで考えてみたいのですが、信仰者といえども人間の力が最終的にこの世界を左右するかのように、また、人間のすることが自分の人生を最終的に左右するかのように思う時があるように思います。多くの人の願いは、日々の糧を得られ健康が守られ、一生懸命に自分の身を守ろうとします。勿論それは大切なことではありますが、自分を守ることだけに一生懸命になって、いつの間にか本来の喜びを失って、気がついたら心と考えがボロボロになっていたということが起こり得るといえます。そのようなことが、19節に記されています。「彼らの行き着くところは滅びです。彼らは腹を神とし、恥ずべきものを誇りとし、この世のことに考えていません。」これは、自分勝手に自分に都合の良い神を信じる者の事が語られており、結局「自分の思い」に過ぎないのです。罪を取り除き、天国への道備えをしてくださった神ではなく、自分の罪と肉欲を満たす神を頼りにしているから、十字架に敵対しているのだと語っています。

教会で語られることは、罪(神を第一としない生き方)からの救いで、永遠の命＝天国への約束です。20節「しかし、わたしたちの本国は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主として来られるのを、わたしたちは待っています。」私たち全ての人間は罪という泥沼に沈んでいます。そのような私たちの傍に来て、私たちを担ぎ上げ、救ってくださった救い主のことが語られるのが教会です。教会でしか聞くことのできない言葉です。これらの言葉が語られなくなったら、それは、もはや教会とはいえなくなるのです。

ある中国人がキリストの救いの恵みを説いている興味深い話で、井戸でおぼれた人の例え話です。「私は浮世の旅路にさまよって、罪と悩みの深い井戸に落ちて溺れそうになっていた。『助けてくれ』と叫んでいると、釈迦が通り合わせたが、上から井戸をのぞき込んで、「これは可哀そうに、だが、これも前世の因果で仕方ない。諦めて往生しなさい」と言って、残して行ってしまった。尚も『助けて』と叫んでいると、孔子がきた。井戸を覗いて「人間というものは、うかうかしていると、そういう所へ落ちるのだ。よく反省して、今度は落ちないようにしなさい」と教えて立ち去った。その次にキリストが来られた。キリストは長い梯子を井戸に降ろし、自分から井戸の底まで降りてきて、疲れ切った私を引き起こし、井戸から引き上げ、解放してくださった。私が元気を取り戻した時に、『うかうかしていると、危険に遭うから、聖書の御言葉を道の光にして、天国に向かって行かない』と教えてくださった。」という話です。イエス様は人間が罪で苦しんでいるのをご覧になり、天から降りて来て人となり、私たちの罪の身代わりになって、十字架によって全ての人を救ってくださる救い主ですから、「キリストは救い主である」と言われているのです。このように私たちの未来は知らない運命の手の中にあるのではなくて、私たちの罪のために十字架に架けられ、復活されたイエス様の神の御手の中であって、信じる者の国籍は天に記されているのです。教会生活において経験し

ていることは、やがて終わりの日に見ることになります。

天国に向かって

先ほど読んだ 20 節の「わたしたちの本国は天にある」という御言葉の古い訳・文吾訳では「我らの国籍は天に在り」となっており、「我らの国籍は天に在り」と、聖書ははっきりと復活の希望を語っています。それは、イエス・キリストの福音を信じるだけで、天の御国に名前が登録されるのです。ホールに飾られているお写真の方々は、このことに希望を抱きながら歩まれました。この地上には罪と死と苦しみがあり、それらのものに取り巻かれて生活だったと思います。しかし、天に属している者としての希望があることを知っているのです。今、私たちが見ていることはまだ一部に過ぎませんし、経験していることは、まだほんの一部です。しかしやがて、完全な命の世界、完全な癒しと救いの世界を見ることになるのです。この世の嘆きの夜も必ず明ける時が来るのです。それが先ほどお読みしたヨハネの黙示録の世界です。週報に記されていますので、ご一緒にお読みしたいと思います。

ヨハネの黙示録 21:3「そのとき、わたしは玉座から語りかける大きな声を聞いた。『見よ、神の幕屋が人の間にあって、神が人と共に住み、人は神の民となる。神は自ら人と共にいて、その神となり、彼らの目の涙をことごとくぬぐい取ってくださる。もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もない。最初のものは過ぎ去ったからである。』」と記されており、イエス様は弟子達に「あなたがたの名が天にしるされていることを喜びなさい」(ルカ 10:20)と言われました。私たちは尚、この世の見聞きしている様々なことに翻弄されることなく、国籍が天にあることを喜ぶ者でありたいです。既に召された方々の後続くものとして。

私たちの天国への希望は、自分自身の中にはなく、神の中にあります。なぜなら、神は私たち一人一人のことを、いつまでも御心に留めておいて下さるからです。私たちが愛する人の記憶をいつまでも大切に胸の中にしまっておくように、神は一人一人の人生の生きたその記憶を、永遠に御心に留めておかれ、終わりの日にその人を甦らせて下さるのです。神にひたすらより頼んで生きた人を、お忘れになることは決してありません。しかも、この神の記憶は、私たちの記憶よりも無限に確かなものです。神は私たちの愛する者を、私たちが大事にする以上に遥かに大切に下さるからです。この世において神と結ばれた人は、天に召された後も、神の御腕の中に抱かれ、終わりの日にその人を甦らせて下さるのです。終わりの日には、私たちも共に、溢れる幸いと光の御国に甦られ、先に召された兄弟姉妹の完全な交わりの中で神を讃美するのです。残された私たちの人生の生涯を、先に召された方々と同じように「国籍は天にある」者として、神を頼みとして歩み、従い、人生の馳せ場を走り抜く者となりたいです。そして、信仰の先達者の群の中に加えられたい、と切に願います。